

場面や状況に応じて最適な方法で人を紹介できる子ども

－ 中学1年「友だちを紹介しよう」の実践から －

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

中学校1年生の1学期は小学校の外国語活動を中学校の教科としての英語へとつなげる橋渡しとなる接続期にある。この時期に小学校の外国語活動において音声で理解してきたことを文の構造やルール（文法）の面からとらえる、つまり言語を分析的にとらえる段階へとスムーズに移行する必要がある。よって、まず入学してから1カ月間は今まで音声でとらえてきたアルファベットを文字として認識させ、文字の組み合わせで単語や文の音が作られていることを意識させるような指導を中心に行ってきた。そしてこのような音声の学習を基礎として、単語から文の学習へのなめらかな移行を図ってきた。生徒は単語や短い文を聞いて、その音を文字と結びつけ、書きとることができたり、初めてみる単語や文などでも音のルールに従ってそれらしく発音することができるようになってきている。

「Unit1 ようこそ、グリーン先生」では、あいさつを交わして自己紹介をし、相手のことをさらに知るために質問をする言語活動を行った。自分のことを紹介する場合と相手に質問する場合では主語になる代名詞とbe動詞を使い分ける必要がある。また、相手に質問する場合には疑問文を用いなければならない。語順を理解している必要がある。この活動において自己紹介の場面ではほとんどの生徒が正しく代名詞とbe動詞を使い分けて自己表現することができたが、相手に質問する段になると語順があいまいになり、肯定文を用いて質問している生徒もいた。さらにこの活動で用いた表現を書かせてみたが、綴りを間違えたり、音声では表現できていた生徒も文字としては正確に表現できないという実態があった。小学校の外国語活動で音に慣れ親しんできているので、音声で表現することには抵抗はないように思われるが、正確に文字として表現すること、語順の習得にはさらなる継続的な指導が必要だと感じている。

(2) 本単元の目標や内容と外国語活動・英語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元は、それまでの一人称、二人称に加えて三人称の概念を理解し、性別によって代名詞を使い分け、適切に人や物を紹介できる力を養うことをねらいとしている。前単元であるUnit1において自己紹介したり、相手に質問をしたりする言語活動を行っており、一人称、二人称の使い分けとそれに伴うbe動詞の一致について学習している。よって本単元のPart3では、ペアで自己紹介し合い、得た情報をもとに相手（パートナー）を別の友だちに紹介するような、場面に応じて思考し、判断したことを表現するような言語活動を設定する。既習事項である一人称、二人称の代名詞とbe動詞の一致の知識の自動化を図り、運用レベルに高めるとともに、紹介する相手によって代名詞を正確に使い分けて、身ぶりや表情などを意識しながら適切に人を紹介できる表現力を習得させたい。このようなかかわり合いを通して、本校英語科が願う「他者とのかかわり合いを通して、基礎的・基本的な知識や技能を高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る生徒」に近づけるのではないかと考える。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

本単元のPart1でthis/thatを用いて、近くにあるものや遠くにあるものを指し示しながら説明する表現を学習する。Part2ではitを用いて、話題になっているものを受けてYes/Noで答えたり、さらに説明を加えたりする表現を学習する。ここで、指示代名詞の知識理解の定着を図りたい。またPart2では冠詞aも新出事項ではあるが、ここでは理解の程度にとどめておき、不定冠詞anと定冠詞theの学習の際に繰り返し学習して定着を図ることとする。Part3では新出事項だけを用いる言語活動ではなく、既習の表現を共に用いることでその使い分け（運用）を意識させ、意味内容の伝達にも重点をおいた言語活動を取り入れる。この活動では、まず最初にペアで自己紹介したり、質問したりする活動を通してお互いのことを知る機会とする。自己紹介と質問のやりとりをする場面では、自分の思いを伝えるためには

どのような表現（構文）を用いるのかを思考し、代名詞（主格・所有格）とbe動詞を正確に選択して（判断力）、自分の思いを適切に伝える表現力が育成される。一方、自己紹介を聞く際にも既習の表現の選択肢の中から、相手が何を伝えようとしているのかを判断し、思考する。そしてうなずいたり、表情で相手に共感を示す。その後で学びを広げ、得た情報をもとに自分のパートナーを別の友だちに紹介する場面を構想する。ペアでの学びを別のペアへとつなげるのである。この場面でも友だちを紹介する生徒は、人を紹介する時に必要な表現を思考し、紹介する友だちにに応じて代名詞を適切に使い分け（判断）、ジェスチャー、表情、アイコンタクトなどを用いて適切に友だちを紹介する表現力が養われると考える。同じように紹介を聞く生徒も、思考・判断を繰り返しながら新しい友だちについての情報を正確に聞き取ることとなる。

本単元では生徒一人ひとりが基礎的・基本的な知識・技能を活用して、思考・判断したことを表現する言語活動を設定した。この言語活動を通して、生徒が他とのかかわりの中で、基礎的・基本的な知識を活用することができたという思いを抱くことが大切である。この思いが個の学びへと還元されて個のさらなる基礎・基本の定着にもつながる。そこで、教師は個が自分の言いたいことを表現できるよう、コミュニケーションを支える文法の基礎的・基本的な知識を定着させるための時間を活動の前半でしっかりと確保するとともに、自己紹介や相手に質問をする際に必要なコミュニケーションの視点を全体に提示する。そして単元の終末には、知識を活用して適切に友だちを紹介できていた生徒の様子を取り上げたり、生徒のふりかえりから自分の言いたいことを表現できてうれしかった、自分の言ったことが相手に通じたという思いを取り上げたりという教師のはたらきかけにより、これらの思いを学級全体で共有し、次の学習への意欲につなげる。以上のことを踏まえて単元を構成し、子どもへのはたらきかけを継続して行っていくことで、子どもたちは自分の言いたいこと、伝えたいことを正確に文字として表現できるようになり、それが語順の習得にもつながるのではないかと考えている。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	身の回りのものについて説明しよう。	1.2	<ul style="list-style-type: none"> ・指示代名詞の働きを知る。 ・This (That) is…の文の形・意味・用法を理解し、表現する。 ・This (That) is…を用いて、身の回りのものについて説明する。
2	身の回りのものについて質問しよう。	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・Is that (this) …?の文と応答の形・意味・用法を理解し、表現する。 ・Is that (this) …?を用いて、身の回りのものについて質問する。
3	友だちを紹介しよう。	5 6 7	<ul style="list-style-type: none"> ・人称代名詞の働きを知る。 ・He (She) is…の文の形・意味・用法を理解し、表現する。 ◇友だちを紹介する活動を通して、代名詞とbe動詞を適切に運用できるようになるとともに、相手を意識しながらジェスチャー、アイコンタクトなどを用いて適切に友だちを紹介できる。 ・パフォーマンステスト

3 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

本単元における学び合いの場面の記録と生徒のふりかえりから、自己紹介や相手に質問をする際に必要なコミュニケーションの視点を上げて全体に提示するという教師のはたらきかけが生徒のパフォーマンスを向上させるのに有効であったかを評価した。また、学び合いの場面での生徒の様子を観察し、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点から生徒の思考力・判断力・表現力を主にコミュニケーションの継続に焦点を当てて評価するとともに、数日後にパフォーマンステストを行い、「外国語表現の能力」の観点から表現の正確さに焦点をあてて評価した。次に評価規準を示す。

次	時	学習活動	学習活動における 具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
3	6	友だちを紹介しよう。	「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」 「外国語表現の能力」 語句や表現、文法事項などの知識を活用し、相手を意識して適切に友だちを紹介している。	活動の観察 ワークシート パフォーマンス テスト	聞き手と紹介する友だちと目を合わせたり、身ぶり手ぶりを交えたりしながら正しい表現を用いて友だちを紹介している。	正しい表現を用いて友だちを紹介している。	語句や表現、文法事項などの知識を活用できず、友だちを紹介することができない。

本校英語科でめざしている学び合いによる思考力・判断力・表現力は中学校の外国語科では新観点の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」に相当すると考えられる。そこで、他とのかかわりを大切にしながら思考・判断したことを表現するような言語活動を授業に取り入れて実践する中で、単元全体を通して生徒の思考力・判断力・表現力がどのように高まったのかを評価するために、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」の3つの観点の評価の推移をグラフにした。

4 授業の実際

○文法の基礎的・基本的な知識の定着を図る

学び合いを通して思考力・判断力・表現力を高めるには、一人ひとりの基礎・基本の定着や技能の習得が確かなものである必要がある。個の知識や技能をうまく活用することができなければ、集団での学びも深まらなると考えるからである。そこでまず、代名詞カルタを用いて教師が代名詞を読み上げ、生徒はその代名詞に適する絵札をとるといったグループ活動を設定した。自己紹介をしたり相手に質問したり、人を紹介する時に必要となる「人称・数・代名詞の一致」を意識せずに瞬間的に判断して使えるようにするため（知識の自動化・無意識化）の活動である。次にペアでHe (She) is…の口頭練習を行った。個人練習とせずペア練習にしたのは、He (She) is…の知識の定着だけを図るのではなく、相手を意識しながら第三者を紹介できるよう、コミュニケーションの視点にも目を向けさせるためである。このような文法の基礎的・基本的な知識の定着を図るための段階的な活動も伝えようとする事柄について、文法的なルールに則って考え（思考力）、場面、状況、相手の表情等に応じて言語材料を選択し、（判断力）場面や状況に応じた最適な方法で相手に伝えることができる（表現力）ようになるためには欠かせない。

○学び合いの場面の構成について

学び合いの場面では、ペアで自己紹介し、その後で相手に質問する。そして得た情報をもとに自分のパートナーをグループで紹介し合う活動である。最初にデモンストレーションとして2名の生徒A、Bが皆の前でこのやりとりをして見せた。資料1はその場面の授業記録である。

資料1 ペアで自己紹介し、相手に質問する場面の授業記録

生徒A Hi. I'm ~. I'm from Tottori. I I… えっ Nice to meet you.

生徒B Hello. I'm ~. I'm from Hiroshima. Nice to meet you.

生徒A Are you in the soccer club?

生徒B No, I'm not. I'm in the rhythmic gymnastics club.

生徒A What's your favorite subject is P.E?
 教師 What's your favorite subject?
 生徒B My favorite subject is English.
 生徒B Are you in the soccer club?
 生徒A Yes, I am.
 生徒B What's favorite subject… What's your favorite subject?
 生徒A I'm favorite subject…
 教師 My favorite subject is…
 生徒A あっ My favorite subject is P.E.

この活動では自分の名前と出身地を代名詞とbe動詞を一致させて伝え、相手の部活動や好きな教科について尋ねる際には語順を変えて疑問文にして質問する必要がある。生徒Aは自分の名前と出身地についてはたどたどしくではあるが伝えることはできた。しかし、相手の好きな教科を尋ねる際にWhat's your favorite subject is P.E?と意味をなさない英語で尋ねている。また、好きな教科を聞かれたときには代名詞を正しく格変化させて用いることができなかった。表現の正確さについて教師はその都度、生徒Aの間違いを訂正するのではなく、正確な表現を用いて言い直すなどして生徒A自身が自分の間違えに気づいて修正できるようなはたらきかけを行った。また、アイコンタクトや笑顔で友だちと会話をするなどのコミュニケーションに必要な視点も意識できておらず、皆に伝わる声量だったかについても課題が残った。そこで、教師は全体に「今の2人のやりとりをみて、良かった点は？」と投げかけてみた。子どもからは「自分でいろいろと考えて言っていた。」などの意見が出て、しっかり考えながら表現できていたことを伝えた。良かった点を認めてもらえたという思いが次へのコミュニケーションへの意欲にもつながると考えたからである。それと同時に、友だちからの「もっとこうした方がいいのではないか。こうしたらもっと良くなるのでは。」というアドバイスも求めた。子どもたちからは「伝えたい部分をはっきりと言った方がよい。」「笑顔で会話をした方がよい。」などの意見が出たので、それらを視覚的に黒板に提示して学級全体で共有し、生徒A、Bだけではなく、生徒一人ひとりのパフォーマンスを向上させるための手立てとした。

このように、友だちからアドバイスをもらって、自分のパフォーマンスを振り返ったあとで、ペアからグループへ、そして学級全体へと他者紹介の活動を広げていった。自分のパートナーを紹介する際には性別によって代名詞を選択した上で、ペア活動で得た情報をもとに文を組み立てなければならず、思考力・判断力・表現力が育成される。また、聞き手も思考・判断を繰り返しながら新しい友だちについての情報を正確に聞き取ることとなる。資料2はグループでの他者紹介を終えて、自分のパートナーを学級全体に紹介する場面の生徒Aについての授業記録である。

資料2 パートナーを紹介する場面の授業記録

生徒A This is ～. He's from Matsue. He's in the basketball club. 違った・・・He's in the track and field club. His favorite subject is social studies. His favorite teacher is Mr. ～.

代名詞を正しく選択し、さらに代名詞を正しく格変化させて男子生徒を紹介している。さらに興味深い点はHis favorite teacher is Mr.～.という英文を用いている点である。生徒Aは自分のパートナー(生徒B)にAre you in the soccer club?と質問していた。生徒Bは女生徒であり、生徒Aはサッカー部に所属している状況から考えてサッカー部に入っているかどうかを質問するのは不自然である。つまり生徒Aは知りたい情報を得るために生徒Bに質問したのではないことが分かる。しかし、学び合いの後半場面でパートナーを紹介する際には、好きな先生は誰なのかという生徒Aが本当に知りたいことを

質問したことが伺える。また、今回は身ぶり手ぶりをつけながら人を紹介する際に必要な視点についても意識しながらパートナーを紹介することができていた。資料3は授業後の生徒Cのふりかえりである。

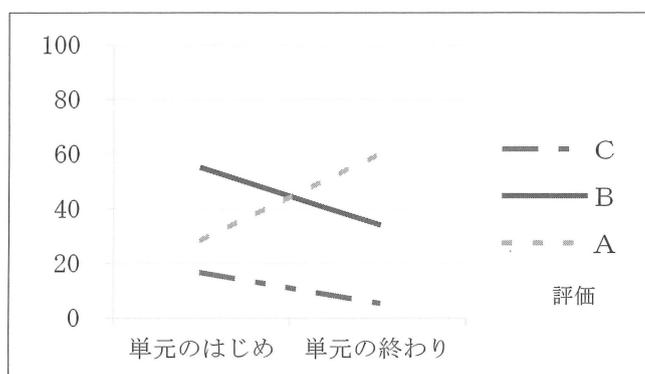
資料3 授業後の生徒Cのふりかえりより

紹介するときに、気をつけなければいけないことがたくさんあって意外と難しかったです。人の紹介も聞いてみて、「まねしたい！」と思うところや「ここは、良くない！」と覚えることがあったので、自分もそこは気をつけたいと思います。

自分のパフォーマンスについてのふりかえりとして良かった点や友だちからのアドバイスを認識し、自分のパフォーマンスを向上させるきっかけとできるような教師のはたらきかけを行った結果、生徒A、生徒Cにこのような変容が見られたことは成果であった。

○単元全体を通して生徒の思考力・判断力・表現力がどのように高まったのか

学び合いによる思考力・判断力・表現力は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」それぞれの観点の力が複合的に組み合わせられた力であると考えられる。そこで、学び合いを取り入れて実践を行う中で、単元のはじめと単元の終わりのそれぞれの観点の評価の推移をグラフに表し、そこから子どもの思考力・判断力・表現力がどのように高まったのかを見とった。グラフ1で「外国語表現の能力」の観点の評価の推移を示す。資料4は単元のはじめと終わりの学習活動と評価規準である。

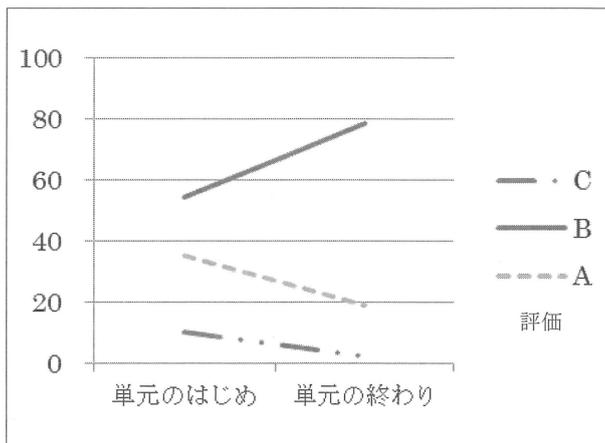


グラフ1 外国語表現の能力
(縦軸は生徒の割合(%)を表す)

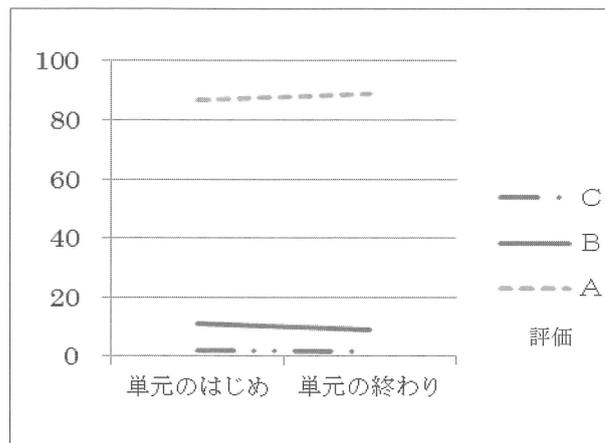
資料4 「外国語表現の能力」の学習活動と評価規準

	学習活動	評価規準
単元のはじめ	身の回りのものについて説明しよう。	身の回りのものについて、正しい表現を用いて説明している。
	身の回りのものについて質問しよう。	身の回りのものについて、正しい表現を用いて質問している。
	あいさつや自己紹介の場面などでの会話表現を書こう。	あいさつや自己紹介などの場面で、適切な表現を書いている。
単元の終わり	自己紹介をしよう。	正しい表現を用いて自己紹介をしている。
	人を紹介しよう。	正しい表現を用いて人を紹介している。
	友だちを紹介しよう。	聞き取った情報をもとに、正しい表現を用いて友だちを紹介している。

グラフ1から単元のはじめより単元の終わりのほうが外国語表現力の能力が伸びていることがわかる。しかし、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「外国語理解の能力」においてはその伸びは見られない(グラフ2, 3)。「外国語理解の能力」については、ほとんどの生徒が単元のはじめで外国語理解の能力の基準を達成していることから目立った伸びが見られなかったのかもしれない。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」はAの生徒が減り、Bの生徒が増えている。



グラフ2 コミュニケーションへの関心・意欲・態度
(縦軸は生徒の割合 (%) を表す)



グラフ3 外国語理解の能力
(縦軸は生徒の割合 (%) を表す)

ここで、生徒のふりかえりをいくつか紹介する。

資料5 授業後の生徒D、Eのふりかえりより

- ・前にやったときは紹介するのに精一杯で、笑顔まではいけませんでした。でも今日は、だいぶ慣れてきたこともあり、意識することができました。(生徒D)
- ・ぼくはアイコンタクトと声の大きさがあまりできていませんでした。アイコンタクトはどうしても紙を見てしまうのであまりできていませんでした。声の大きさも少し小さかったと思います。(生徒E)

生徒Eは友だちを紹介する際、その表現力に自信がもてなかったため、自分が書いた友だちの紹介文を見てしまい、コミュニケーションを円滑に継続させることができていることが読み取れる。これらのふりかえりから、生徒にとって「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点のコミュニケーションの継続に関する部分より「外国語表現の能力」の方を習得するのが先であり、ある程度表現力が定着していないと、それらを用いて相手を意識したコミュニケーションをとることができないのではないかと考える。学び合いを授業に取り入れて実践してきたが、単元を通して生徒の「外国語表現の能力」に高まりが見られた。「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」のさらなる定着を図るような言語活動を継続的に取り入れていくことで、次のステップであるコミュニケーションを継続させる力も育成できるのではないだろうか。そして最終的にはこれらの力を複合的に使う思考力・判断力・表現力の育成にもつながるのではないかと考える。

5 成果と課題

他とのかかわりを大切にして、思考・判断したことを表現する言語活動を取り入れ、生徒自身に認められたという思いを大切に、その思いを次へのコミュニケーションへの意欲へとつなげようと試みた。また、アドバイスを学級全体で共有して自分のパフォーマンスを振り返らせ、向上させることができるようなはたらきかけを行った。その中で、生徒が自分の思いや伝えたいことを語句や表現、文法事項などの知識を活用し、相手を意識して表現しようとする姿が見られたことは成果である。また、この実践で「外国語表現の能力」にアプローチできたことも意味があった。今後は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語理解の能力」のすべての能力の育成を図り、学び合いを通して思考力・判断力・表現力を高めていきたい。また、学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価の在り方について研究するとともに、その評価をいかに個に還元していくかも今後の課題である。

(文責 高田 純子)